

葛尾村三匹獅子舞の舞踊構造と伝承内容

一柳 智子 (郡山女子大学短期大学部)

Report of Investigation on the Triple Lion Dance-Sanbiki Shishimai- in Katsurao Village

Tomoko ICHIYANAGI (Koriyama Women's College)

Abstract

In Katsurao village, Fukushima Prefecture, the Triple Lion Dance is still performed by a ceremonial group called Saiten-gumi. This article will analyze the dance performances of Taro Lion, Jiro Lion, and Hanako (which continue to be staged after the 2011 Great East Japan Earthquake) in order to reveal the current structure of the Triple Lion Dance and consider its significance for the people in Katsurao village.

The current Triple Lion Dance is a condensed version of the traditional dance. Despite its abridged nature, the modifications preserve the basic and minimum motions of the dance. Furthermore, the modification provides some changes to the repetitive choreography of the traditional dance. In this way, the current version of the Triple Lion Dance is a living representation of the way we can simultaneously preserve and evolve traditions to fit changing times.

Keyword: Katsurao Village, The Great East Japan Earthquake, The Triple Lion Dance,

はじめに

福島県葛尾村は、県東部阿武隈高地の中にある山村である。現在人口約1400人であり、近世相馬藩領と三春藩領を繰り返した地であった。阿武隈高地は比較的地盤が安定しており、葛尾村の場合、東日本大震災における被害は、震災より原災によるものの方が大きかった。

震災後、長らく設定されていた帰還困難区域以外の居住制限区域と避難指示解除準備区域が2016年に解除された。以後、村の多くの人々は、除染により低減された線量のもと自由に自宅等村内に帰宅あるいは一時帰宅が可能となった。

三匹獅子舞は、震災後近隣の三春町の仮設住宅広場等で伝承され続けてきたが、解除後、村内での実施が可能となり、令和年間に入り今年、ついに祭礼行事である日山神社での舞の奉納が行われる予定となった^{注1)}。

当該獅子舞は、これまで福島県による調査報告^{注2)}以外の調査報告はなく、県内および全国的な位置づけも明らかにされてこなかった。本稿は、このような状況下における葛尾村の三匹獅子舞の現況を調査した結果を報告するとともに、現在伝承されている舞踊動作と構造および伝承の内容を分析し、福島県浜通り地区の三匹獅子舞の特色を考察し、県内および全国的な位置づけのための資料を提示するものである。

1. 三匹獅子舞とは

一般に獅子舞といわれている民俗芸能には、大きく一人立ちのものと二人立ちのものに分類され、歴史的に別系統とされている（本田安次，1957：1～24，笹原亮二，2003：16～17ほか）。二人立ちの獅子舞は、伎楽や舞楽とともに大陸から輸入された獅子舞であるが、ここでいう三匹獅子舞は一人立ちの獅子舞を指す。笹原は、小寺融吉、柳田國男の日本固有説ではなく、本田安次の説をとる。つまり、西日本の風流踊の一種である花笠を被り踊り手の腹部の太鼓を叩きながら歌と囃子に合わせて踊る太鼓踊が近畿地方で大流行し、16世紀末から17世紀初頭に東日本に伝わり、江戸を中心とした地方に伝播した。したがって、概ね近世以降江戸を中心に徐々に東日本に伝播していったとみてよいと考える（笹原亮二，2003：16～17）。

2. 福島県の三匹獅子舞の分布

福島県には県全域に多くの一人立獅子舞^{注3)}が伝承されている。ただ、浜通り地方北部の旧相馬藩領においては、四匹以上の多頭が登場するものがあるが、やはり三匹の獅子舞が圧倒的に多く、菊地和博（菊地和博，2017：283-284）は、この多数伝承されている福島県の関東系の三匹獅子舞を、茨城・栃木方面からの伝播とする一方、多頭のを旧相馬藩によるものと想定している。いずれにせよ、福島県には浜通り地方北部の多頭の一人立獅子舞と県全域に伝承されている三匹の一人立獅子舞との2系統の存在がある。平成3年の福島県の調査報告^{注4)}によれば、200件ほど報告されているうち32件はこの時点で廃絶しており、一人立獅子舞のうち多頭の一人立獅子舞は5件のみである。つまり、三匹獅子舞が数字的にも圧倒的に多いことがわかる。

3. 葛尾三匹獅子舞

これら県内多く伝承されている一人立獅子舞のうち、葛尾三匹獅子舞は福島県双葉郡葛尾村葛尾において踊られており、村指定の無形民俗文化財である^{注5)}。三匹獅子舞という名称と獅子の頭数、岡崎という滑稽な役柄の登場人物等から概略的に判断して、上述で菊地和博の言う関東系の三匹獅子舞と推定される。

現存の正確な上演関連記録は、大正期以降の文書が確認されている^{注6)}。しかし、口承の伝承によれば、江戸後期には上演されていたようである。

東日本大震災前は、毎年旧暦8月18日の日山神社^{注7)}、旧暦9月9日の磯崎神社の両祭礼行事において境内地で踊られていた。震災後は、葛尾村の人々が多く避難している三春町の過^{よきあし}足団地葛尾村仮設住宅広場等にて継承されていた。その後、2018年10月日山神社祭礼行事が復活され、三匹獅子舞の「頭」のみ山頂の日山神社に奉納された^{注8)}。以前は2日目に行われていた笠ぬきは、その日の午後、地元の下葛尾集会所にて行われた。

3-1. 運営・伝承団体

本三匹獅子舞は、伝統的に「祭典組」と称する運営団体によって継承されている。ただ、村の指定文化財に登録される際の「葛尾祭典組」^{注9)}という正式名称があるが、村内では通常「祭典組」のみ汎用的に使用されているので、本稿ではそれに従う。組織は、正世話人1名、副世話人1名、会計1名、世話人7名で、合計10名である（表1）。概ね40歳位の男性である組織員は、一年毎に更新される。2018度と2019年度の踊り子（小学生男児）は、祭典組の運営に参加している父

表1 祭典組の組織

名称	人数
正世話人	1名
副世話人	1名
会計	1名
世話人	7名

親の子どもであることが確認された。

この祭典組は、三匹獅子舞に関する、運営、継承、練習、上演等についてのすべての事柄を担当している。祭礼行事担当の氏子組織との関係は、祭礼全体を取り仕切る氏子総代団体の下部組織となっている。

3-2. 登場人物と囃子方

登場人物は、太郎獅子(写真1)、次郎獅子(写真2)、花子(写真3)、岡崎(写真4)の4人である。太郎獅子の頭には角が3本、次郎獅子には1本、花子には角はない。この3名はすべて小学生の男児が担当している。岡崎は、ひょっとこ面をつけ道化的役割として登場する。踊り子の父親が担当している(2018年、2019年度)。囃子方は、大太鼓1名、笛数名である(写真5)。

三匹の獅子たちは、頭上に各々の頭をつけて、腹には鞆鼓を付け、両手に桴を持っている。

花子とは、女獅子に対する現在の伝承者の方々の呼称である。本稿では伝承者の方々の呼称「花子」を用いることにする。初心者の踊り手は、まず花子から担当することになっている。そして、次年度以降に次郎獅子、太郎獅子と発展的に担当が変遷していく。このことは、舞踊動作分析の結果とよく符合している(4.1.舞踊構造分析参照。)



写真1 太郎獅子(一柳撮影)



写真2 次郎獅子(一柳撮影)



写真3 花子(一柳撮影)



写真4 岡崎(一柳撮影)



写真5 囃子方(一柳撮影)

3-3. 三匹獅子舞の上演構成

表2と表3は、三匹獅子舞の全体構造の伝統的な場面呼称と近年の場面呼称の一覧表である。

現在、映像記録に残っている構成の三匹獅子舞は、文化財指定時の1983年のものがある。その記録によれば、すでにこの時各場面は祭典組の人々によって表3の名称で呼ばれていた。しかし、口承伝承によれば、三匹獅子舞の展開を分節化した各場面の伝統的な名称は表2のようである。その後の1991年福島県の報告書と同時期の葛尾村史にもこの名称で報告されている。

近年の祭典組の伝承実態の認識（表3）と伝統的呼称（表2）との詳細な関係は明らかにされていない。つまり、1991年の調査報告書には、表2の伝統的な各場面呼称と簡単な場面説明があるが、説明文がごく簡易なため近年の表3との照合は困難である。ただ、表2の「六 岡崎（道化）」と表3「7岡崎1」、表2「十一 宮参り」と表3「17 宮参り」が対応していると考えられるので、全体の中頃と終盤は照合することができる。

本稿では、近年の祭典組の伝承用語に従い、さらに中頃の「7. 岡崎」「8. 唄」という場面が前半と後半を分節する場面と判断でき、さらに現行の上演内容がそれに合致していること、また「岡崎」とは三匹の獅子とは別登場人物であることによりここでは扱わず、表3の前半部分であり現行の1～6のみに着目して三匹の獅子の舞踊構造分析を行う。

表2 三匹獅子舞の上演構成

伝統的場面呼称	
一	庭入り
二	庭見
三	ごとく立
四	ちどり
五	まきよせ
六	岡崎（道化）
七	歌きり
八	かかしかり
九	いかりの庭
十	岡崎御幣の舞
十一	宮参り

表3 三匹獅子舞の上演構成

近年の場面呼称	
1	始まり
2	花子
3	いかん1
4	次郎
5	いかん2
6	太郎
7	岡崎1
8	唄
9	カーカーチ1
10	カーカーチ2
11	けんか
12	次郎ころぶ前
13	次郎ころぶ後
14	次郎おきる
15	岡崎2-1
16	岡崎2-2

4. 現行の三匹獅子舞

本田はすでに戦後昭和30年代に伝承の危機を危惧しているが、それでもわが国には全国的に多くの民俗芸能が伝承されている。ただ、それらは皆現代的諸事情の影響から逃れることは困難であった。上演時間の制約や芸態に対する変更は全国共通事項である。上演時間は、神社等の本来の舞踊の場以外の民俗芸能大会のような公演形式の上演機会が増えたことに伴い、共通して時間短縮となった。さらに現代の子どもたちに関わる諸事情により、また練習時間の確保の困難さからも上演時間は確実に短縮されていった。

葛尾村の三匹獅子舞は、舞台上演用の短縮版が準備されたが、それでも、平成に入ったあたりまで表2に示した版（約1時間）が上演されている^{注10)}。現行の短縮版は、表3の1から7に相当し、時間は約15分である。

4-1. 舞踊構造分析

舞踊構造の分析は次の点に着目した。第1次抽出単位は、一般的に最小の動作と認識しうる動作に記号を付与する。次に最小単位の動作の反復様態と動作のまとまりに着目し、それをフレーズとして認識する。さらに、全体構造の枠組み構成する一定のまとまった動作群を大フレーズとして分節化して、全体構造の把握のための最大動作群とする。

表4から7は、表3の1から7に対応する。つまり表3の「1始まり」の動作分析結果が表4であり、順次表3の「2花子」は表5、表3の「4次郎」は表6、表3の「6太郎」は表7に対応する。

4-1-1. 始まり (表4参照)

この場面は、三匹獅子舞の本編の始まりの部分である。「始まり」の場面の中でも、特に0番目の始1は、歩行様動作であるので別枠とした。したがって全体の導入であり本編への序であり、立ち上がりの動作といえる^{注11)}。

その後、「始まり」の本編となる。大フレーズⅠとⅡに大別できる。ここでは終始3人とも同様の動作を行い、2度目のⅠのくり返しでこの場は終了する。ここでは本編全体の舞踊動作の基礎的動作単位がすべて出現している。

始2は、両手をあげて両足飛びを行う動作である。この時、下肢は同時に曲げられる。運動量の多い動きである。

始3は、身体を右回りに回転させながら後退する。まず90度右回りに方向返還し、その位置から180度方向転換する。そして、後ずさりする動作である。

始4は、両手は上に上げないで、両肩に掛けながら両足飛びをし、両肩に掛けたまま両足屈伸に入る動作である。

始5の「さしばち」とは、祭典組の伝統的な動作名称である^{注12)}。動作内容は、右肩関節を軸として右腕全体を、肘関節をのばしたまま後方に1回転させる。その後、上半身下向きになり、右手のバチを地面に向かって刺すようにする(写真6)。「上半身のなおりあり」とは、低い位置で構えた姿勢で上半身下向きから上向きに起こす動作である。8番目の始8の「上半身のなおりなし」は、この動作がない。

始6は、足を斜め方向に出し、深くゆっくりと下肢の屈伸をしながら1歩ずつ進む動作である。この時、両手は身体の後でつないでいる(写真7)。始まりの場面では、この屈伸は左足、右足、左足と3歩分すすむ。5番目は左足から出すが、9番目は右足から出している。つまり5番目と9番目の始6は、左右の動作が反転している。



写真6 さしばち (一柳撮影)



写真7 下肢の屈伸 (一柳撮影)

始7は、腹に着けた鞆鼓を両方のバチでたたく動作である。

始8は、「始3」の後半の動作である後ずさりのあと「さしばち」をするが、上半身のなおりはない。この場面では、以上動作単位は9種類抽出できる。

表4 始まりの場面

大フレーズ	フレーズ	番号	動作記号	動作説明*1	立ち位置*2				時間
					左	中	右	図	
0		0	始1	歩行様動作（両脚交互に直角の位置まで上げる）左足からあげる。×40回	太郎	花子	次郎	図1	37秒
					3人同じ動作				

I	F1	1	始2	両足飛び（両手あげ）×3回	3人同じ動作	図1	1分20秒
		2	始3	右回り・後ずさり（90度方向転換のあと180度方向転換し、そのあと後ずさりする）		図2	
		3	始4	両足飛びから両足屈伸（両手肩にかける）		図1	
		4	始5	さしばち（上半身のなおりあり）*3		図3	
II	F2	5	始6	深い両足屈伸（両手うしろ） 左足・右足・左足		図3	
		6	始7	太鼓たたき		図1	
	F3	7	始5	さしばち（上半身のなおりあり）		図4	
		8	始8	後ずさり・さしばち（上半身のなおりなし）		図3	
	F4	9	始6	深い両足屈伸（両手うしろ） 右足・左足・右足		図1	
		10	始7	太鼓たたき			
11		始9	両足飛び（両手あげ）（笛の「ピー」がある）				
I	くり返し						

*1 ここでの左右は踊り手にとっての左右を意味する。

*2 ここでの左右は踊り手に向かったの左右を意味する。

*3 5番目と9番目の始6は同じ動作の左右反転版である。

4-1-2. 花子（表5参照）

この場面は、「始まり」の大フレーズIとIIが交互に反復したあと2度目の大フレーズIIから同様の動作をソロで踊る。その間太郎獅子と次郎獅子は花子の後方にて相互に向かい合ったまま、「始1」を終始くり返す。動作自体は「始まり」と同様であるが、花子のソロである点により、この2度目の大フレーズIIより花子の場面として分節化した。したがって、花子の場面では、「始まり」の場面で抽出された動作単位以外現れないので、花子固有の動作はない。

表5 花子の場面

大フレーズ	フレーズ	番号	動作記号	動作説明	立ち位置				時間
					左	中	右	図	
II	表4の大フレーズIIのくり返し			太郎	花子*1	次郎	図5	約1分45秒	
I	表4の大フレーズIのくり返し			右向*2	正面	左向*2	図5		
II	表4の大フレーズIIのくり返し								

*1 花子の立ち位置は中央のままである。したがって位置移動なし。この場面からは、花子はソロで踊る。しかし、花子固有の舞踊動作はない。

*2 太郎と次郎は、花子の後方にて向かい合い、表4大フレーズ0を繰り返し行う。それ以外の動作は行わない。

4-1-3. いかん1、2（図6、11参照）

「いかん」とは、踊り手の配置転換を意味する。ただ、配置転換ののち、「ごとくたち」^{注13)}になり太鼓をたたく動作がある。この部分は、「花子」の場面から「次郎獅子」の場面へ（図7）、「次郎獅子」から「太郎獅子」の場面へ（図11）の2回行われる。横1列の立ち位置が、図1から図8へ、図8から図13へ転換される。

4-1-4. 次郎獅子 (表6参照)

大フレーズⅢ、Ⅳと2分類できる点は、「始まり」「花子」と同様である。Ⅲ、Ⅳと1度全体を通し、その後2度目のⅢに戻った後、「始まり」「花子」と同様F2以降、次郎獅子のソロパートとなる。次郎獅子は正面を向いたまま踊る。大フレーズの反復展開に入った後、次郎獅子の後方にて、太郎獅子と花子が向かい合い、始1を終始行う。動作展開とフォーメーションは「花子」の展開と同様である。

この次郎獅子の固有な動作は、次1である (写真8)。両上肢を水平に伸ばし、両下肢を左右に広く開いて大の字に立つ。その後、両肘、両膝を伸ばしたまま、膝関節が曲がらないように体軸の斜めにして片足ずつ交互にあげる動作。左足、右足、左足、右足、左足と5回あげる。

表6の6番目の始6は表4の5番目の始6とは回数のみ違う動作である。また、表6の6番目の始6と12番目の始6は同じ動作であるが、左右が反転している。2度目の大フレーズⅣから次郎獅子のソロパートになり、正面で次郎獅子が踊っている後方にて花子と太郎獅子が向かい合って始1を終始する動作は、花子のソロパートの展開と同様である。



写真8 次1の動作 (一柳撮影)

表6 次郎獅子の場面

大フレーズ	フレーズ	番号	動作記号	動作説明*1	三匹獅子の位置*2と動き				時間
					左	中	右	図	
Ⅲ	F5	1	始2	両足飛び (両手あげ) × 3回	太郎	次郎	花子	図8 図9	約4分 5秒
		2	始3	右回り・後ずさり (90度方向転換のあと180度方向転換し、 そのあと後ずさりする)	3人同じ動作				
		3	始4	両足飛びから両足屈伸 (両手肩にかける)					
		4	次1*3	全身大の字になり、足を交互にあげる。					
		5	始5	さしばち (上半身のなおりあり)					
Ⅳ	F2	6	始6	深い両足屈伸 (両手うしろ) 左足・右足・左足・右足	3人同じ動作			図10	
		F4	7	始7					
	8		始9	両足飛び (両手あげ) (笛のピーがある)					
	F3	9	始7	太鼓たたき					
		10	始5	さしばち (上半身のなおりあり)					
	F2	11	始8	後ずさり+さしばち (なおりなし)					
		12	始6	深い両足屈伸 (両手うしろ) 右足・左足・右足・左足					
	F4	13	始7	太鼓たたき					
14		始9	両足飛び (両手あげ) (笛のピーがある)						
Ⅲ	くり返し				右向	正面	左向		
Ⅳ	次郎のみくり返し								
Ⅲ	次郎のみくり返し								
Ⅳ	次郎のみくり返し								
					*4	正面	*4		

*1 ここでの左右は踊り手にとっての左右を意味する。

*2 ここでの左右は観客側から踊り手に向かっての左右を意味する。

*3 次郎に特有な動作は、次1である。

*4 12番目の始6から太郎獅子と花子の位置交換が行われる。14番目の終わりに、完全に位置移動が終了する。

4-1-5. 太郎獅子（表7参照）

大フレーズV、VIに2分できる点は、「始まり」「花子」「次郎獅子」と同様である。V、VIと1回全体を通し、その後2回目のVに戻った後、F2以降太郎獅子のソロパートとなる。太郎獅子は正面を向いたまま踊る。大フレーズの反復展開に入ったあと、次郎獅子の時と同様、後方にて、次郎獅子と花子は向かい合い、大フレーズ0を続ける。

太郎獅子に固有の動作は、太1、太2、太3の3種類である。

太1は、獅子頭を上半身とともに大きく左から右へ、右から左へ振る動作である（写真9）。この時、上肢は身体背面で結び、下肢は上半身の動作に連動して最初は向かって右向きに前後に大きく開く。次に頭を右から左へ振る時は、その反対の動作を行う。太郎獅子固有の動作の中でも最も勇壮で運動量の多い動作である。

太2は、上半身を前かがみにし、その場で両下肢を交互に後ろへ蹴る動作である。

太3は、実はその中に太2を含んでいる。13番目の太3は、8カウントで180度の方向転換を行い、同様の動作をもう1回行う。合計2回行う。14番目の太3は、半分の4カウントで180度の方向転換を行う。15番目は、4カウントで180度方向転換後、2カウントで180度の方向転換を2度行う。13、14、15番目のF9と22、23、24番目のF9の相違は、13番目は8カウントで180度の方向転換を2回であるのに対して、22番目は1回である点である。その後の展開は全く同じである。



写真9 太1の動作（一柳撮影）

4-1-6. 舞踊構造分析の結果

舞踊構造分析の結果、次の2点が明らかとなった。

1点目は、動作構成の規則性であり、2点目は、三匹獅子舞の教習性である。

花子、次郎獅子、太郎獅子の主な登場人物の一連の舞踊動作の構造を、動作の最小単位を抽出することによって分析した。結果、最小動作単位の組み合わせによるフレーズが抽出でき、さらにそれらが全体構造のなかで反復してることが明らかとなった。また、各フレーズは、左右反転および回数調整によって種々の版は規則を持って創り出されていることも明らかとなった。そして、その諸版を計画的に各場面に配置した大フレーズを抽出できた。この大フレーズは、どの場面も共通して2種類に分類でき、前半と後半に2分された。これら2分された大フレーズは、規則的な順序性を持って反復され、全体としての三匹獅子舞としてまとまりを持ったものとなった。

次に、教習性である。花子、次郎獅子、太郎獅子の順で動作の種類と難易度が上昇している。これは、踊り子の初心者は花子から始め、次郎獅子を習って、最終的に太郎獅子を担当するという順序に合致している。そして踊りの習得難易度が、担当役柄の順序である花子から次郎獅子、太郎獅子へと上がっていく点と合致している。具体的には、花子の踊りは、始まりの全員が踊る踊りと内容のみであり、次郎獅子で新規舞踊動作1種が加わり、太郎獅子では3種が加わる。徐々に踊る時間も増加するという、段階的教習と実演内容である。

表7 太郎獅子の場面

大フレーズ	フレーズ	番号	動作記号	動作説明*1	三匹獅子の位置*2と動き				時間
					左	中	右	図	
					花子	太郎	次郎		
V	F5	1	始2	両足飛び(両手あげ)×3回	3人とも同じ動作	図13		6分 15秒	
		2	始3	右回り・後ずさり (90度方向転換のあと180度方向転換し、 そのあと後ずさりする)					
		3	始4	両足飛びから両足屈伸(両手肩にかける)					
		4	次1	両腕を横に伸ばし、全身大の字になり、足を交互にあげる。左右左右左 5回(写真)					
	F6	5	太1*3	頭ふり 左→右、右→左					
	F7	6	太2*3	前かがみ+足けり 左右左右左5回ける					
	/	7	始4	両足飛びから両足屈伸(両手肩にかける)					
	F8	8	次1	2回					
	F8	9	太1	頭ふり 左→右、右→左					
	F8	10	次1	3回					
		11	太1	頭ふり 左→右、右→左					
VI	F2	12	始6	深い両足屈伸(両手うしろ) 左足→右足	3人とも同じ動作	図13		6分 15秒	
	F9*3	13	太3	太2+両足飛び(両手うしろ) 8カウントで180度1回方向転換(×2回)		図14			
		14	太3	太2+両足飛び(両手うしろ) 8カウントで180度→180度方向転換(×1回)					
		15	太3	太3+両足飛び(両手うしろ) 8カウントで180度→180度→180度					
	F2	16	始6	深い両足屈伸(両手うしろ) 右足→左足		図13			
	F4	17	始7	太鼓たたき					
		18	始9	両足飛び(両手あげ)(笛のピーがある)×1回					
	F3	19	始7	太鼓たたき		図14			
		20	始5	さしばち(上半身のなおりあり)					
		21	始8	後ずさり+さしばち(なおりなし)					
	F9*3	22	太3	太2+両足飛び(両手うしろ) 8カウントで180度1回方向転換(×1回)		図14			
		23	太3	太2+両足飛び(両手うしろ) 8カウントで180度→180度方向転換(×1回)					
		24	太3	太2+両足飛び(両手うしろ) 8カウントで180度→180度→180度					
	F2	25	始6	深い両足屈伸(両手うしろ) 左足→右足		図13			
	F4	26	始7	太鼓たたき					
27		始9	両足飛び(両手あげ)(笛のピーがある)×1回						
V	くり返し								
VI	太郎獅子のみくり返し				右向	正面	左向		
V	太郎獅子のみくり返し								
VI	太郎獅子のみくり返し								

*1 ここでの左右は踊り手にとっての左右を意味する。

*2 ここでの左右は観客側から踊り手に向かったの左右を意味する。

*3 太1、2、3及びF9の動作は、太郎獅子に固有の動作である。

5. おわりに

民俗芸能における舞踊動作の規則を持った反復は、見る人に安定性という印象を与える。子どもたちによる民俗芸能を実施するための教習を念頭に置いた順序性もよく考えられたものであった。

祭典組の人々は、子どもが中学に上がるとクラブ活動などで忙しくなるので、小学生のうちしかできないと発言される。現代の小学生は、昔の小学生より忙しい。必然的に民俗芸能の練習時間が少なくなる。そのことと、踊る機会の時間制限が相まって短縮版の創出になり、現代版の上演となってきた。葛尾村の三匹獅子舞は、伝統の舞踊動作を再構成しつつ、踊りの教習における現代の要請に拠りながら確かに継承されている。

フロア図

凡例

- 舞踊の場に下記のような長方形の結界が描かれるわけではないが、ここでは便宜的に舞踊の場の枠とした。下が踊りの正面である。
- 図の二等辺三角形の頂点が踊り子の正面である。
- 矢印は位置移動の軌跡である。
- 図14のみ踊り子の正面の180度の転換を示す。

- ▽ 太郎獅子
- ▽ 次郎獅子
- ▼ 花子
- ▽ 岡崎

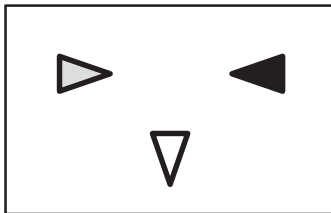


図 1

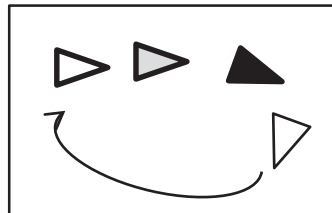


図 2



図 3

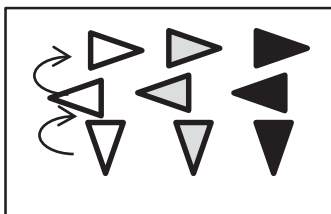


図 4

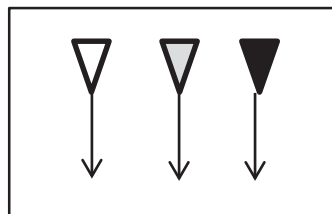


図 5

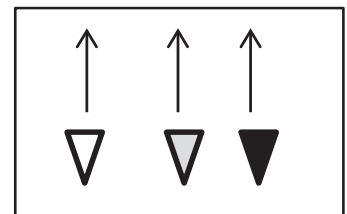


図 6

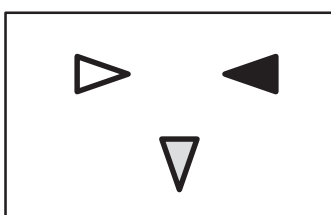


図 7

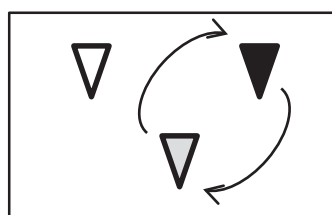


図 8

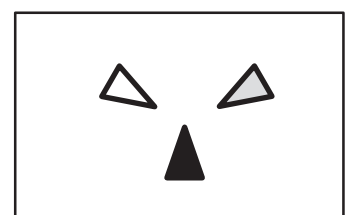


図 9

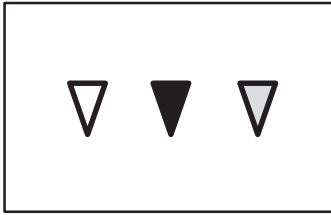


図 10

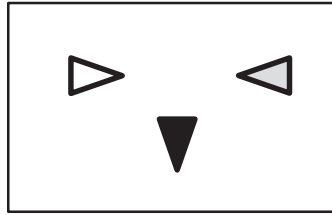


図 11

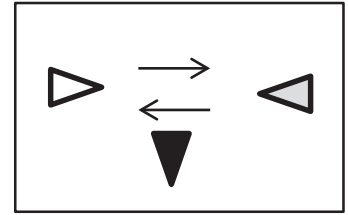


図 12

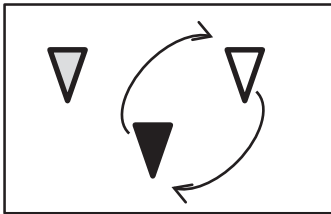


図 13

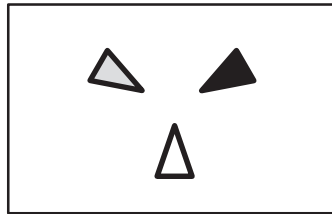


図 14

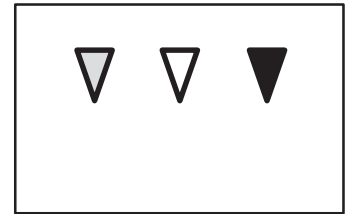


図 15

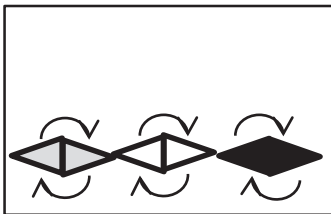


図 16

注

注 1) 令和 1 年 10 月 12 日日山神社山頂での祭礼行事が行われる予定となり、三匹獅子舞の人々も山頂に上がる予定と
していた。しかし、台風 19 号の日本上陸により葛尾村にも記録的な大雨が降り、山頂に登ることは中止となった。
祭礼行事は縮小され、地元の下葛尾集会所にて実施された。したがって、三匹獅子舞も下葛尾集会所にて踊られた。
(令和 1 年 10 月 12 日筆者調査による。)

注 2) 『福島県文化財調査報告書第 261 集 福島県の民俗芸能—福島県民俗芸能緊急調査報告書—』平成 3 年 3 月 31 日、
福島県教育委員会。

注 3) 上記報告書によれば、これらの獅子舞系の踊りは「一人立獅子舞」という分類項目名となっている。

注 4) 注 2) に同じ。

注 5) 昭和 48 (1983) 年 4 月 28 日指定。

注 6) 当該文書に関しては、現在分析中である。(令和 1 年 9 月 30 日現在)

注 7) 平成に入ったところから伝承者の時間的制約により新暦 10 月の第 1 日曜日ごろに開催されてきた。筆者の調査では、
平成 30 年 10 月 6 日 (土)、令和 1 年 10 月 12 日 (土) に開催された。東日本大震災後は、磯崎神社での奉納はない。

注 8) 令和 1 年 10 月 12 日には、三匹獅子舞の踊り手等これまで通りの舞の奉納が行われる予定である。(令和元年 9 月
30 日現在。)

注 9) 平成 26 年度福島県民俗芸能継承状況アンケート調査による。

注 10) 祭典組の踊り子経験者へのインタビューによる。

注 11) 両脚大腿部を交互にあげるこの動作のモチーフを「歩行動作の形式化」と解釈すれば、動作単位の発生源は表 2「一
庭入り」と推測可能である。

注12) 令和1年度氏子総代松本和雄氏へのインタビュー（令和1年7月13日）による。松本和雄氏は三匹獅子舞の経験者である。

注13) 令和1年度氏子総代松本和雄氏へのインタビュー（令和1年7月13日）による。

文献

- ①菊地和博，2017，『東北の民俗芸能と祭礼行事』，清文堂出版：大阪，283-284.
- ②笹原亮二，2001，「三匹獅子舞の分布」，『国立民族学博物館研究報告』，第26巻第2号.
- ③笹原亮二，2003，『三匹獅子舞の研究』，思文閣出版：京都，16-17
- ④本田安次，1957，「獅子舞考」，『日本民俗学』5（1）：1-24.
- ⑤山路興造，1986，「三匹獅子舞の成立」，『民族芸能研究』第3号
- ⑥福島県編，1964，「第三編民俗芸能」，『福島県史』，第23巻民俗1：591-1044.